

受動態の成立過程に関して

松 尾 誠 之

序

古い時期のドイツ語に於ける受動態の用法については、なお明らかにしなければならないことが少なくない。

例えば、ist + 過去分詞（以下、PP と記すことがある）の時称は何か、またそれは動作を表わしているのか、状態なのか、というような問題である。これは Nhd. の文法では、状態受動と呼ばれるものであるが、古い時代のドイツ語では、単に状態受動というだけでは片づけられない多面的な様相を呈する。それは、時代、文献により異なった使われ方をするのである。学者の説くところも、受動現在、受動現在完了、状態受動、或は ist + 形容詞、等々と様々である。

ドイツ語の受動態は WERDEN⁽¹⁾ + PP、或は SEIN⁽¹⁾ + PP という迂言形式で表わされる。この迂言形式がどの程度、一つのまとまりと受け取られるか、或はまた、助動詞、及び過去分詞がどの程度、独立したものであるのか。また、それと関連して、過去分詞が形容詞的性格の強いものなのか、動詞的性格の強いものなのか。更に ist + PP + worden という形はどのような事情の下で成立していったか、それ以前にはこの意味はどんな形式で表わされていたか、等々について、見ていくことにする。四章から成り立っているが相互に関連し合った事柄を扱う。それぞれ一定程度、異った角度から述べていくことになろう。章毎に目を向ける対象が多少異なるとはいうものの互いに密接なつながりを持っている。

執筆にあたって、先行の学者の研究に負うところが多かったのは勿論である。第三章の過去分詞に un- が付くか付かないか、という事実もそれ自体は知られていたわけであるが、受動態の動作↔状態との関連に於て問題とされることは、筆者の知る限り、今までなかったようである。

一. 過去分詞の自立性

ドイツ語では Ahd. の最初期から、受動態は迂言形式をとった。ゴート語に見られるような単一形は既に消滅してしまっていた。その代替形としての迂言形は **WERDEN+PP**, あるいは **SEIN+PP** というものであった。

この迂言形も後の時代には、意味上一つの動詞のようになっていった。しかし、始めから一体のものとして機能したわけではなからう。**WERDEN** や **SEIN** はそれなりの固有の意義を有するし、それは過去分詞についても同じことである。

過去分詞は元来、対応する動詞と同じ語根から作られる形容詞であった。それが動詞的性格を持つようになり、今日言う意味での過去分詞となった。更にまたこの過去分詞が二次的に、純然たる形容詞となる場合のあることはよく知られている。

Rupp, S.266, *passim* によれば Ahd. の受動態は nominal⁽²⁾な性格が強いとされる。つまり、Ahd. の時期の過去分詞は形容詞、或は名詞に近いものと見なされている。過去分詞が形容詞と異なる点は、前者が、その表わされた状態に到る過程を認識し得るのに、後者にはそのようなことがないことである (Rupp, S.268)。

このようなことから、Rupp は態動態、受動態というカテゴリーすら、独自のものとして認めない (Rupp, S.266)。Er ist gekommen と Er ist geschlagen は元来、Er ist ein Gekommener, Er ist ein Geschlagener ということの意味したというわけである。両者の間には形態上の区別がない。これはラテン語には能動態完了と受動態完了との間に明確な形態上の差、例えば venit↔absconsa est があることと対照させて考えられている。もっとも、彼自身、Deponentia を除外例としている (Rupp, S.267)。しかしこれは例外として片づけられることであろうか。Deponentia の場合、その完了形は受動の absconsa est と同形式の迂言形となり、形態上の差はない。ということになると、Rupp の論法をもってすれば、ラテン語に能動↔受動の区別がない、というようなことにもなりかねない。

また逆に、ドイツ語に於て、能動 HABEN⁽³⁾+PP↔受動 SEIN+PP という対立は現実存在する。勿論、SEIN 支配の自動詞の場合には、形態上、受動形と区別がなくなるが。

更に Rupp が資料として扱っている Isidor では、ラテン語原典の能動態完了が全て過去形で訳されている (Schröder, S.25)。ということになると、

SEIN+PP という形で現われる PP は受動の意味を明示的に表わしていることになる⁽⁴⁾。

いずれにせよ、形態上から、ドイツ語に能動、受動を区別する意識が薄いとするのは無理である。

時称についても、Rupp の考え方では、過去分詞は nominal なもので、動詞的なものとは認めないから、WERDEN, SEIN と結合して迂言形式の時称を作るとは考えない。通常は助動詞的なものとして扱われる WERDEN, SEIN がこの場合は本動詞とみなされる。従って、WERDEN, SEIN の時称に着目しさえすればよく、ist, wirdit なら現在、ward, was なら過去⁽⁵⁾ということになり、極めて単純である。

しかしまた、Rupp の言うように、Er ist gekommen のような場合を受動の SEIN+PP と同列に扱うことになると、Tatian あたりはSEIN +自動詞のPP が状態を表わしているから問題はないが、その後は SEIN+自動詞のPP が現在完了の意味を帯びていく (Dal, S.123 によれば Otfrid 以降) ので、時称のずれを生じる。このことから、SEIN+自動詞のPP を受動形と同列には扱い得ないことが明らかである。時称ということだけなら、受動態の場合、助動詞の時称をその文の時称としてよいであろう。しかし、SEIN と WERDEN では事象のとらえ方が異なる。Rupp, S.272, 275 によれば WERDEN は動作 (Vorgang), SEIN は所与 (Gegebenheit) を表わすとされる。

以上のように、Rupp の考え方で行くと、過去分詞が形容詞のように扱われ、従って、非常に自立性の強いものと考えられる。もっとも、Ahd. も時代が下るに従って、受動形式の過去分詞の動詞的性格が強くなっていくことは Rupp も認めている (Rupp, S. 285)。しかし大勢としては nominal な性格が強かったとしているのである。

このように、過去分詞に形容詞的性格が認められるとする議論そのものは、不穏当なものではないが、その根拠として、語尾変化することを挙げるのはどうであろうか。Rupp は受動形の過去分詞が、その主語と性・数・格に於て一致することに注目している。しかし、ラテン語の場合を考えれば判るように、これは、実際には、それ程有力な根拠とはなり得ない。

またラテン語の場合を持ち出さず、議論をドイツ語内の事情に限ってみても同じことである。

Ahd. では、初期に於ては、形容詞、過去分詞、共に無語尾形というものがない。過去分詞が形容詞と全く同様な語尾変化を行う。そこから、過去分

詞が形容詞的なものだ、との結論が引き出される。

他方、時代が下るに従って、形容詞は付加語として用いられる時以外は語尾をとらなくなる。それをとらえ、形容詞が語尾変化をしなくなったからといって、形容詞が別の何かに変質したというようなことが果たして言えるだろうか。これは考え難いことである。

述語として使用される形容詞が語尾変化しなくなるのと並行して、受動形の過去分詞も語尾変化しなくなる。受動態の過去分詞が無語尾になっていくことをとり上げて、形容詞的なものから動詞的なものへの変化の現われだとしてすることがある。

しかし、同時に本来の形容詞の方も、語尾変化しなくなるのであるから、過去分詞の無語尾化をもって動詞化の現われとする論理は成り立たない。形容詞の無語尾化が現われる以前に過去分詞の無語尾化が始まっているというのなら話は別であるが。

もしも語尾変化ということからだけで議論を進めるのなら、過去分詞が語尾変化しなくなるのと同時に、形容詞も語尾変化しなくなるのであるから、過去分詞は引き続き形容詞の性格を保持した、と主張することも可能となってしまう。

以上のように考えてくると、形態面だけから議論を進めるのは問題があると思われる。

ドイツ語の受動態が迂言形式をとる以上、その初期の用法に於ける助動詞と過去分詞との一体性が問題となることは当然である。もともと二つの独立した要素が、時代の下るに従って、意味上、一体化したものとして機能するようになる、というのが受動態の発展の歴史である。しかしながら、ある時期のある文献に於て、この一体化がどの程度進んでいると見るか、が判断の分かれるところなのである。

時称に関しては、**Rupp** の考え方で行けば、**Ahd.** に於ける過去分詞に自立的性格を認めることにより **WERDEN**、**SEIN** も本動詞となり、**WERDEN** と **SEIN** との間の時称の差はなくなる。このことそれ自体は、かつての理論のように、初期のドイツ語の受動態に複雑な時称を割り当てるような無理なことをしておらず、妥当なものと思われる。

しかしながら、その迂言形としての発展に於ては、**SEIN+PP** の形より **WERDEN+PP** の方が早くに動詞的なものとなっていったのではなかろうか、と推測されるのである。**Rupp** は上にも記したように、**SEIN+PP** を所与、**WERDEN+PP** を動作としているが、過去分詞が **SEIN**、

WERDEN とそれぞれ結合する場合、WERDEN とよりも、SEIN との方が、過去分詞はその自立性を保ち易いということが言えるのではないだろうか⁽⁶⁾。

二. ist+PP…von+動作主

sein + PP という形式に於ける PP の性格については大体、二つのものが考えられる。一つは動詞的なものであり、他のもう一つは形容詞的なものである。そして、この両者の間に明確な一線がひき難いことは Wilmanns § 73.2, PMS § 319.1. 等の指摘する通りである。

ところで Wilmanns § 73.2は動作主が現われることが動作的⁽⁷⁾であることを示す、としている。これは、状態受動は動作主を伴わないとする、Nhd. の文法と一致するように見える。

しかし、Brinker, S. 85 は Nhd. の受動態の研究に於て、次のような事実を明らかにしている。即ち、文法書には、状態受動が動作主を伴わない、或は伴うことができないとしているにもかかわらず、彼の調べた資料では動作主を表わす語句を伴う場合が少なくないというのである。

彼の調べた資料では、動作受動の場合、その中の13.7%が動作主を伴うのに対し、状態受動では12.6%が動作主を伴う。この数字を見れば、動作受動が動作主を伴うのとあまり変らない比率で、動作主を伴う状態受動が現われることになる。このことは、一般の、状態受動は動作主を伴わないとする説をはっきり否定するものである。

Brinker の挙げている例で、

Heute ist aber die Wissenschaft noch sehr viel mehr von einer ameisenhaften Betriebsamkeit erfüllt.

という文は状態を表わしていると考えられるが、それにもかかわらず von einer ameisenhaften Betriebsamkeit という動作主を伴っているのである。このことから逆に、sein+PP の文が動作を表わしているのか、状態を表わしているのかを決定するのに、von+動作主の有無だけでは何とも言えないことになる。

そこで今度は Mhd. の場合を見てみよう。資料は Hartmann von Aue の Iwein である。

Iw—Wb の「von」の項から SEIN+PPの文がないかどうか見てみると

1519 Swie im sine sinne

von der kraft der minne
vil sêre wæren überladen,

(Wie sehr seine Gedanken
von der Gewalt der Liebe
auch bedrängt waren,)

[Th. Cramer による Nhd. 訳。以下同じ]

1734 ern müese sîne vrouwen sehen,
von der er was gefangen.

(wenn er seine Herrin nicht sehen könne,
von der er gefangengenommen war.)

5786 ez wære ein wol gemuot man
erværet von der arbeit.

(selbst ein beherzter Mann
wäre ob solcher Gefahr in Furcht geraten.)

6286 swie gar von armuot ir sin
wære beswæret,

(Wie sehr ihr Gemüt auch von Armut
tief bedrängt war,)

以上の例では、いずれも **SEIN+PP** でありながら、**von+動作主**が現われている。しかし、そのいずれもが、意味より判断して、状態受動の文である。

Iw. に於て、**von+動作主**が現われる受動文は、

720 iu sî von mir widersaget

(Ich sage Euch Fehde an)

のような、接続法現在による命令文を除けば全部で11例ある。そして、その中の6例が **WERDEN+PP** であり、5例が **SEIN+PP** である。

このことから、状態受動であっても、動作主を伴う場合が少なくないことがわかる。

逆に言えば、Mhd. についても、von+動作主の有無からだけでは、それが動作受動か、状態受動かを決定することは不可能なことが明らかである。

本章の冒頭に挙げた Wilmanns の所説は、Ahd. の SEIN+PP が動作であるか状態であるかの判定のためのものであった。しかし、以上、Nhd. Mhd. の用例からみれば、Ahd. に於ても、状態受動が von+動作主を伴う場合が十分あり得ると思われる。従って、ある SEIN+PP の文に於て von+動作主の存在が、動作受動であることを示すとする Wilmanns の考え方は適当ではない。

三. un—PP

Grimm の辞書の「SEIN」の項の II 33d を見ると、古い時代のドイツ語では、否定の意味を表わす un—が、形容詞や、或は完全に形容詞化した過去分詞ばかりでなく、純然たる過去分詞にも付くことがあると記されている。つまりまだ十分に動詞的性格を保ち、従って、構文的にも一般の過去分詞と同じ形式で現われる過去分詞が通常の形容詞と同じように un—をとることがある。

同書に 2 つの例が挙げられている。

belibens was in ungedäht. Wigalois

daz ich wil wesen unbetrogen

von der werlt unbestetichait. Suchenwirt

Wigalois の例はともかく、Suchenwirt の場合は von der werlt unbestetichait という動作主が現われていることから、この文の受動態の性格が明らかである。そのことから、また、unbetrogen が完全に形容詞化してはいないこと、即ち動詞的性格をなお保持していることが知られる。

逆に、問題となる文で、un—PP が現われる場合、この von+動作主がその文に存在すれば、その un—PP が動詞的性格を持つと判断することができるだろう。von+動作主が現われていない場合でも un—PP が動詞的性格を持っている場合も多いことであろう。例えば、Nhd. の Das Fenster wurde gebrochen. という文を見て、von+動作主がないから、受動文ではないなど

と言う者はあるまい。それと同様、von+動作主が存在しなくても un—PP が動詞的性格を持っている場合が当然あり得るわけであるが、所謂、意味内容からだけで判定すると主観的要素の入り込む余地が大きくなるから、形式上からも問題のないように、ここでは von+動作主を伴う文だけを扱うことにする。

Iw. では次のような例が見出される。

4398 der wille was dâ ungespart
von manne und von wibe,

(Jedermann bewies ihm Wohlwollen)

この ungespart であるが、これに対応する un—の付かない形 gespart も Iw. に見出される。

5436 dazn wart ouch hie niht gespart

(Das wurde auch hier nicht verabsäumt)

7310 diu swert enwurden niht gespart

(die Schwerter aber wurden nicht geschont)

この2つの例で、gespart は wart, wurden と結びついていることから明らかなように、純然たる過去分詞である。

上の2つの例と考え合わせると、4398の ungespart は、事実上、niht gespart というのに殆んど等しいと考えられる。

ここで対照的なのは5436, 7310の例では、いずれも niht gespart となっていて、ungespart とはなっていないことである。

これはどういうわけであろうか。理由として考えられるのは次のようなことである。WERDEN+PP という動作受動がよく動詞的性格を保ち、また、この場合の PP が本来の意味での動詞的性格を有する過去分詞であること、従って、un—という否定接頭辞が形容詞に付くものであるとの前提にたてば、動作受動の PP はまだ形容詞的性格よりも、動詞的性格の方が強いから un—と結合することができないこと、である。

これに対して、状態受動の場合に PP に un—が付くことができるのは、

SEIN と結合する PP の形容詞的性格によるものと考えられる。状態受動の過去分詞に形容詞的性格を認める議論は多い⁽⁸⁾が、以上のように、否定接頭辞 un—が付くということはその有力な根拠となるであろう。

以上で状態受動の PP に否定接頭辞 un—がつくこと、またそのことから、状態受動の PP には形容詞的性格が強いことを確認した。

ところで、今まで述べてきたような、構文上は von +動作主を伴うということから動詞的性格を持ち、形態上は un—が結合していることで形容詞的性格を有する例は、ドイツ語の歴史で、Mhd. にのみ特有のもののようにある。

Ahd. にはないようであるし、Nhd. についてはDuden 9, S. 658「un—」の項で、un—のついた形を動詞的に用いること、例えば das von mir ungelesene Buch ということは不可とされている⁽⁹⁾。

四. ist+PP+worden の成立の事情

Nhd. の受動態現在完了は ist+PP+worden の形で表わされる。この形が最初に現われるのは13世紀で、用例として、Parzival の

nu wasez ouch über des jâres zil,
daz Gahmuret geprîset vil

58, 1 was worden dâ ze Zazamanc⁽¹⁰⁾,

が挙げられる。

この ist+PP+worden という形がどのような事情の下で成立していったのか、ということを見てみよう。

ist+PP+worden が ist+PP という形から派生していったように説かれることがある。つまり、ist+PP が現在完了の意味で使われていく傾向があった、とするものである。しかし、Beh. S. 208によれば、ist+PP が現在完了の意味で使われることは多くはなかった⁽¹¹⁾という。見かけ上の形こそ、ist+PP+worden は ist+PP に worden がくっついたというかっこうをしているが、ist+PP を実際に現在完了の意味で使うことがあまりなかったということになると、ist+PP+worden の発生を ist+PP と関連づけるのは無理であろう。

むしろ、この現象は、現在完了の成立という体系的な観点からとらえるべ

きである。ドイツ語に於ても、時代が下るに従って、時称体系が分化していく。現在完了は過去に生じた事象を現在との関連に於てとらえようとする場合に使用されるものである。

では、どのようにして完了形が成立していったか。いま、能動完了の場合を考えてみよう。普通、説かれるところでは、**Ich habe den Hund gesehen** というのは、本来 **Ich habe den Hund als Gesehenen** ということであった、とされる。**Ich habe den Hund als Gesehenen** ということは、事象を状態としてとらえていることになる。事実、Mhd. に於ても **HABEN+PP** が完了ではなく、状態の表現として使われている場合がしばしばある。ところが、Nhd. で **Ich habe den Hund gesehen** といえ、これは動作を表わしている。ここに状態→動作という発展が見られる。

このように見てくると、受動の場合でも、状態から動作への移行が考えられても良いのではないかと、とも思われる。

にもかかわらず、問題となるのは、**HABEN+PP** が Ahd. の時期から状態的表現よりも、完了的動作に使われていると見られる場合が多いこと、これに反して、**SEIN+PP** が動作を表わす場合は少なく、状態を表わすと見られる場合が圧倒的に多いこと、である。

能動完了の場合には、我々が目にし得る初期のドイツ語の段階で、大勢は、状態から動作へ移行してしまっている。これに対し、受動の場合、**ist+PP** が動作を表わしている場合が現在に至るまで少ないのである。もし、**ist+PP+worden** の形が現われる時期までに、**ist+PP** が頻繁に動作受動としても使われていたのであれば、**ist+PP** が動作を表わしているのか、状態を表わしているのか、あいまいになる。そこで動作であることをはっきりさせるために、**ist+PP+worden** という形式が発生した、とでもいうことになるであろう。しかし事實は、**ist+PP** は状態を表わすことが多かったのである。

フランス語の **être+PP** が動作も状態も表わすのは、遠くラテン語の時代から続いていることである。もっとも時称については、ラテン語では **esse+PP** が動作を表わす場合は完了であるのに対し、**être+PP** は現在である点が異なっている。フランス語では **être+PP** が動作を表わすのか、状態を表わすのかあいまいなため、動作を表わす場合は受動態を使わずに、**on** を使って表現するのが伝統的な慣用であるとされている。もつとも Wandruszka, S. 45, 46によれば、最近の報道関係の言葉では **être+PP** が動作を表わす場合が目立って多くなっているということであるが。

英語に於ても、元来は **SEIN** と **WERDEN** の両方の受動態が存在した。

ところが後に **WERDEN+PP** の形式が消滅し、**SEIN+PP** のみになってしまい、これが動作受動をも表わすようになっていった。この英語史の例は我々に教えるところが大きい。つまり、動作対状態という関係に於て、**WERDEN+PP** という動作を表わす受動形式が存続している間は、**SEIN+PP** は動作を表わす必要はなかったからである。

ひるがえって、ドイツ語の場合はどうであったのだろうか。ドイツ語にあっては **WERDEN+PP** が使われなくなるということがなかったから、動作受動は **WERDEN+PP** で表わされればよかった。従って **SEIN+PP** が動作受動をも表わさねばならない必然性はなかったのである。

以上のように見てくると、**ist+PP** は状態、**ist+PP+worden** は動作という点で決定的な食い違いを見せている。また、時称の点でも、**ist+PP** は現在、**ist+PP+worden** は現在完了（広義の過去の一つ）ということで、両者の相異ははっきりとしたものである。したがって、**ist+PP+worden** を **ist+PP** と関連づけて、導き出すのは無理であろう。

次に考慮しなければならないのは、Mhd. にあっては、Nhd. ならば現在完了形で述べることを過去形で言い表わしている場合が少なくないという事実である。

PMS § 302 b に挙げられた例では

Iw. 6116 *ichn kom nie her durch iuwer leit*

(„ich bin nicht hierher gekommen, um euch Leid anzutun“)

というのがある。今は能動態について述べたのであるが、受動態の場合はどうであろうか。

能動態の場合は、Mhd. に於て、現在完了を表わす **HABEN+PP**、もしくは **SEIN+PP** という形式が既に存在していたにもかかわらず、過去形が使われたのであった。つまり、Nhd. なら現在完了で言い表わすところを、Mhd. では現在完了で述べたり、過去形で述べたりしたのである。

このような、能動態の事情に対し、受動態の場合には **ist+PP+worden** という現在完了の形は殆んど未だ使われていなかったと考えてよい。この形は本章の始めに記した、**Wolfram** の例が最初期のものであるとされている。しかし実際には、この形はなかなか一般の受け入れるところとはならず、その後しばらくの間は散発的な使用例が見出されるのみである。**Dal, S. 129**によれば **Luther** 訳聖書に於てもなお、この **ist+PP+worden** という形はまれであったという。勿論、ドイツの北部地域より南部地域 (**Wolfram** もそ

うであるが)で、この形が早く広まっていったという方言的差異は頭に入れておかねばならないだろう。

Wolfram より時代が前の Hartmann von Aue の作品には **ist+PP+worden** という形は現われない。また、実際に、**ist+PP** という形が現在完了的に使用される例は Mhd. では一般的に少ない。事実、Hartmann の場合、**ist+PP** がはっきり現在完了的に使われている例は見当らないのである⁽¹²⁾。

過去の事象を現在との関係に於てとらえるという現在完了の形式が存在しないとすれば、現在完了も広義の過去と解されるから、代って過去形が使われることになろう。

この考え方は、さかのぼった Ahd. の時期の Isidor の用例を見ることによって、更に確度の高いものとなる。Isidor では、Schröder, S. 25 によれば、ラテン語原典の受動完了が大部分過去形の **WERDEN+PP** で訳されているのである。また、能動態の場合、ラテン語の完了は例外なく過去形で訳されている。これは極めて注目すべきことである。何故なら、Ahd. の文献の多くが、そのもとになったラテン語原文に引きずられて、ラテン語化した奇形的なドイツ語となってしまうのに対し、Isidor はラテン語原文にとらわれない、ドイツ語固有の表現を追求していると広く認められている文献だからである⁽¹³⁾。

上の Isidor の用例に於けるラテン語の完了とドイツ語の過去形との対応は、ラテン語の完了に歴史的完了 (**Perfectum historicum**) という用法があることからすれば納得のいかないことではない。Nhd. で訳す場合でも過去形で訳すことは少なくないからである。しかしながら、能動態でラテン語の完了が例外なく過去形で訳されていることは、当時のドイツ語に於て **HABEN+PP** が動作完了として確立していなかったことを思わせる。しかし、能動態の場合は、時代の下った Mhd. に於て確立した形式となっていった。これに対し、受動態では、完了形は Mhd. の後半の時期に現われ、文法形式として確立するのは Nhd. の時期に入ってからである。ということになると、**ist+PP+worden** で表わされるべきものは、Isidor 以来の過去形の **WERDEN+PP** でしか表わすことができなかつたはずである。**ist+PP+worden** の形式が確立して、**ward+PP** は、その任務の一部をこの形式に引き継いだのである。

Beh. S. 202 の記述も、形式の面から、上に述べてきたことを支持している。即ち、**ist worden** は **worden** がくっついてできたのではない。一般的

に過去形に完了形が並行して成立し、**er was** に **ist gewesen** が、**er wart groz** に **er ist groz worden** が対応するように、**wart geboren** に **ist geboren worden** が並立的に成立したのである、と。

以上、見てきたところから、**ist+PP+worden** は、機能的にも、形式的にも、**ward+PP** がその先行形式であると考えられる。

注

- (1)、ここで **WERDEN, SEIN** と記したものは、**Ahd., Mhd.** 或は場合によっては **Ae.** に於て **Nhd.** の **werden, sein** に対応するものを抽象的に表わしている。つまり具体的には、**Ahd.** では **werdan, wesun/sin**, **Mhd.** では **werden, wesun/sin**, **Ae.** では **weorðan, wesun/bēon** ということになる。
- (2)、**nominal** とは **substantivisch** ということではない。この **nominal** は名詞的と形容詞的の両方の意味を合わせ持っている。
- (3)、この **HABEN** も注1、に記した、**WERDEN, SEIN** と同様に、時代、方言の差を超えた抽象的なものとして考えている。
- (4)、**Beh. S. 200**は **Isidor** に於ける **SEIN+PP** の **PP** を全て形容詞と解している。
- (5)、初期の段階については、既に **Wilmanns § 73.4** がこれと同じことを言っている。
- (6)、これに関し、**Mhd.** に於ては **SEIN+PP** の過去分詞の方が、より形容詞的、従って自立的性格が強いとみられる形式上の根拠の存在することが第三章で述べられる。
- (7)、**Wilmanns § 73.2**の原文には「動詞的 (**verbal**)」とある。しかし、**Wilmanns** は所謂、動作受動を動詞的、状態受動を形容詞的と呼んでいる。実際、**§ 73.1.** で **Die Bäume sind gefällt.** の **gefällt** は「状態表示として全く形容詞的に」解することができるとしている。
- (8)、例えば注7の **Wilmanns** の場合を参照。
- (9)、因に、副詞的に用いる過去分詞の否定には **nicht** を用いず、**un-**をつけるとされる。**Er ging unpräpariert zur Schule. Das Kind mußte ungegessen zu Bette.** (山田, **S. 339**)
- (10)、「ガハムレットがツァツァマンクで…称賛を博してから一年以上の歳月がたった。」(加倉井, 他, **S. 29**による)
- (11)、同書に記された例のうち、一つ挙げれば、**Nib. 2116,4 mir ist noch vil selten geschenkt bezzet win.** 「こんなうまい酒はついでもらったことがない。」(相良, **S. 266**による)
- (12)、**PMS. S. 389**には状態か動作か決め難い例が多数、挙げられている。例えば **Iw. 1460 ouwê wie bistû mir benommen?** („ach, wieso bist du mir entrissen? ” oder „entrissen worden”)

この例のように現在完了かと思われる場合でも、同時に状態受動とも解されること

が多い。明らかに現在完了とみなされる数少い例については注11を参照。
⑬, Schröder, S.12, Rupp, S.269 を参照。

引用文献

- Beh. =O. Behaghel : Deutsche Syntax II, 1924
Brinker =K. Brinker : Das Passiv im heutigen Deutsch, 1971
Cramer = Th. Cramer : Iwein ; Urtext und Übersetzung, 2. Aufl.
Dal=I. Dal, Kurze deutsche Syntax, 3. Aufl.
Duden 9 =Duden 9, Zweifelsfälle der deutschen Sprache, 1972
Grimm=Grimm : Deutsches Wörterbuch
Iw. =Iwein, Herausgegeben von G. F. Benecke und K. Lachmann.
Neu bearbeitet von L. Wolff. 7. Ausg.
Iw-Wb=Wörterbuch zu Hartmanns Iwein von G. F. Benecke, 3. Ausg.
PMS=Paul/Moser/Schröbler : Mittelhochdeutsche Grammatik, 20. Aufl.
Rupp=H. Rupp : Zum ‚Passiv‘ im Althochdeutschen, in : PBB 78 (1956)
Halle S. 265—286.
Schröder=W. Schröder : Zur Passiv-Bildung im Althochdeutschen, in : PBB
77 (1955) Halle, S. 1—76.
Wandruszka=M. Wandruszka : Das Passivum in den romanischen Sprachen,
im Englischen und Deutschen, in : Der Deutschunterricht (Stuttgart) 13
(1961) S. 41—46.
Wilmanns=W. Wilmanns : Deutsche Grammatik, III/1, 1906
加倉井, 他=加倉井, 伊東, 馬場, 小栗, パルチザール, 1974
相良 =相良守峯訳, ニーベルンゲンの歌, 後篇, 昭和43年
山田 =山田幸三郎; ドイツ語ハンドブック, 昭和35年

その他, 引用することこそなかったが参考にした著書, 論文は多い。特に次のものには
負うところが少くない。

外村直彦, 「ドイツ語受動態の歴史的変遷」

人文論集 (静岡大学人文学部人文学科研究報告) No 27 (1976)